

## コラム 韓国の小学校英語教育事情

カレイラ松崎順子

韓国の小学校における英語教育は、1972年一部の指定学校で特別活動の時間に行われ、第4次教育課程がはじまる1981年より教育改革の一環として小学4年生以上を対象に「特別活動」のなかで始まった(金, 2007; 師子鹿, 2009; 杉山, 2008)。1980年代の韓国は経済的に大きく発展し、1988年に第42回オリンピックがソウルで開催されるなど、韓国が国際化にむけて真剣に取り組み始めた時代である(師子鹿, 2009)。そのような中、小学校における英語教育は第5次教育課程がはじまる1988年に学校ごとに自由な学習活動を行うことができる「裁量時間」を利用しながら主に小学5・6年生を対象に実施された。さらに、1995年11月に、1997年から小学校において英語を正規の必修科目とすること、小学3年生から学年進行で段階的に導入することが告示され、その後2年間に複数の研究校における試験実施が行われたのち、第7次教育課程が1997年に制定された(師子鹿, 2009; 杉山, 2008)。

第7次教育課程は「人材育成の目標として、①国際化・情報化に対応できる基礎能力を保持し、②個性豊かで創造的な能力を発揮でき、③韓国および国際社会に貢献できる一人材の育成をあげている」(樋口, 2008, pp.127-128)。また、小・中・高一貫を目指しており、小学1年生から高校1年生は「国民共通基本教育課程」として一貫性のあるカリキュラムを編成し、高校2年生から高校3年生は「選択中心教育課程」という水準別授業を実施した(樋口, 2008)。小学校においては共通課程の「基本課程」のほか「深化・補充型水準別教育課程」を導入して能力別授業を推奨している。「深化・補充型水準別教育課程」は児童が能力と個人差に応じて教育を受けることができるように、基本課程の達成水準に達しない児童を対象とする「補充課程」と基本課程の達成水準に達した児童を対象とする「深化課程」に分かれている(韓国教育部, 1997)。

第7次教育課程において小学校の英語教育の指導方針として以下のようなことがあげられている(韓国教育部, 1997)。

- 実生活の中での感覚と経験が思考と行動に深く作用し、好奇心が強いという小学校の児童たちの特性を考慮する。
- 実生活で接することのできる感覚と遊びを中心とし、体験学習を通じて発見の楽しさを味わうことができるようにすることが効果的である。
- 児童は、記憶する能力が十分とは言えず、集中力も長く続かないので、反復学習等やマルチメディアのような、多様で興味を引くことのできる教育媒体の活用を推進する。

また、必修化導入時の1997年は第6次教育課程が適用されており、当初、小学校において、英語は週2時間(1授業時間は40分)実施されることになった。しかし、2001年度から開始された第7次教育課程において「裁量時間」が「裁量活動」に改称されるとともに従来の週0~1時間から週2時間に拡大されたことに伴い、英語の授業時間数が小学3年生から小学4年生では週1時間に減った。なお、小学5年生から小学6年生では週2時間実施されている。したがって、英語の年間実施時数は、小学3年生から小学4年生で34時間、小学5年生から小学6年生で68時間である(韓国教育部, 1997)。

2007年に第7次教育課程が10年ぶりに改訂され、2009年度から随時施行されている。第7

## 第5章 未来型のこどもの外国語能力と促進法

次教育課程では、小学3年生は「聞く」「話す」のみで、小学4年生で「読む」を開始し、「書く」は小学5年生から導入されていたが、2007年の改訂で、「読む」が小学3年生に、「書く」が小学4年生に導入されることになった。

3年生においては、簡単な単語を聞いて理解し、挨拶などの定型文や一文の簡単な指示、命令が理解できることが目標とされているのに対し、4年生ではやさしくて簡単な対話を聞いて、対話が起きた場所と時間などが分かる、簡単な対話が理解できるなどが目標となっている。さらに、5年生では過去に関する文章を理解し、簡単な話や対話を聞いて状況を理解し、基礎的な電話の対話を理解するなどより難しい内容が理解できるようになることが目標となっており、6年生では簡単な話や対話を聞いて事件が起きた順序や対象を比較するやさしい話や対話を聞いて理解するなどより複雑な英語を理解できることが目標となっている。

「話す」においては3年生では身近な単語の名前や挨拶などの慣用的表現をいうなど、3年生で「聞く」の目標とされるものが話せるようになることが目標として設定されている。4年生では日常生活でしばしば使われる慣用的表現や身近な事物と人に関して1~2文で話すなど4年生の「聞く」において目標となっていることが話せるようになることが達成基準となっている。5年生になると2~3の連続した文が話せるようになり、さらに過去のことが言えるようになるなど表現できる範囲が広がっていく。6年生では簡単な対話を聞いて、その内容や細部事項が言えるようになり、絵や漫画の内容を順に話せるようになるなどさらに高度な内容が話せるようになることが目標となっている。

「読む」に関しては3年生ではアルファベットの認識や簡単な単語を認識することが目標となっているが、4年生になるとそれらを読むようになることが目標となる。また、5年生になると簡単な語句や口頭で習った語句を読むなど様々な語句が読めるようになることが目標となり、6年生ではやさしくて簡単な文章を読むようになることが達成基準となっている。

「書く」に関しては4年生ではアルファベットや習った単語が書けるようになることが目標となっているが、5年生では学習した単語を聞いて書き取るや音と綴りの関係を基礎にして書けるようになるなど、単語がしっかり書けるようになることが目標となっている。6年生では口頭で習った語句や文章などが書けるようになることが達成基準となっている。

韓国では小学6年生の約7割が英語学習のために、塾や家庭教師を利用しているといわれている（韓国教育部，2007）。ゆえに、塾が多い都市と塾やその他の学習手段が乏しい地方では英語の学力格差が生まれている。たとえば、韓国では毎年小学6年生を対象に「国家水準学業成就評価」という全国規模の学力テストを実施しているが、都市と地方における点数差は英語が最も著しく（渡辺，2008）、そのような問題を解決する方策の一つとして、政府は多様なマルチメディア資料や Information and Communication Technology (ICT) ツールを活用することを奨励している（渡辺，2008）。これらのメディアの代表であり、政府が最もその発展に力を注いでいるのが、2007年4月に開局した英語番組専門放送チャンネルである EBS-e である（渡辺，2008）。

EBS は1990年に KBS（韓国放送公社）から教育放送部門が分離して開局した教育放送の専門局であり、2003年に公社化され、現在の EBS となった。EBS は地上波として教養・文化・芸術番組を放映しており、衛星波は、EBS プラス1（大学入学試験専門番組）、EBS プラス2（小・中学生向け番組・資格取得・職業訓練）、および EBS-e（英語番組専門）の3つにわかれている。

## 第5章 未来型のこどもの 外国語能力 と促進法

なお、EBS-e は衛星放送とともにケーブルテレビでも配信されており、韓国全世帯の約8割が視聴可能であり、日本の文部科学省にあたる韓国の教育科学技術部が財政支援を行っている(渡辺, 2008)。EBS-e は英語教育の番組のみを放送しており、視聴者を「幼児」、「小学生」、「中学生・高校生」、「母親・教師」、および「成人・一般」の5つに区分している。この5つのゾーンのなかで最も大きな部分を占めているのが、小学生向けの番組である。現在、ホームページ上に75の小学生向け番組があり、すべての番組を視聴することができ、レベルテストやゲームなども行うことができる。

日本と韓国は外国語としての英語すなわち外国語としての英語教育の環境にあり、「アジアの非英語圏」という「外国語学習環境」という点で、似通った環境にある。韓国の英語教育の情勢は、今後の日本の英語教育を考えるうえで大いに参考になるであろう。

### 参考文献

- 韓国教育部(1997).『小学校教育課程』入手先 <[http://www.kice.re.kr/ko/board/view.do?article\\_id=60421&menu\\_id=10134](http://www.kice.re.kr/ko/board/view.do?article_id=60421&menu_id=10134)> (参照 2010-01-10)
- 金泰勲 (2007).「韓国の小学校における英語教育の現状と課題」『日本大学教育学会』 42, 75-94.
- 師子鹿元美(2009).「韓国における早期英語教育—釜山広域市小中学校英語没入教育特別職務研修プログラムを通して—」『別府大学短期大学部紀要』 28, 71-80.
- 杉山明枝(2008).「韓国小学校英語教育の10年と今後の動向小学校英語必修化に動きだした日本への示唆」『論集』 29, 64-88.
- 樋口謙一郎(2008).「韓国——英語教育政策の経緯と論点」『小学生に英語を教えるとは?アジアと日本の教育現場から』めこん, 123-136.
- 樋口忠彦(2005).「諸外国における小学校外国語教育」樋口忠彦(編)『これからの小学校英語教育—理論と実践—』 研究社, 1-33.
- 渡辺誓司(2008).「放送・メディアが小学校英語を豊かにする ～韓国の事例から～」『放送研究と調査』 6月号, 56-65.